

「学恩」への謝辞

うすうす気が付かれた方もあると思いますが、この「館長の社会論サイト」は私の人生の終わりを仕上げるための準備になります。今の流行り言葉で言い換えますと、この「館長の社会論サイト」のホームページは私にとっての「終活」だという事です。

自分のこれまでの人生を振り返ってみると、自分でも驚くのですが、「なんとまあ精いっぱい生きてきたことか」と感動さえ覚えます。まだなすべき義務やしたいことはたくさんありますが、人生での今の時点でこのようなことが言えるほど懸命に生き苦しみ喜んできました。そして確実に言えることは、私がこのように生きてこられたのも、多くの人たちに支えられてきたからであります。

何よりも私の両親、親せきや地元の地域の人たちの暖かい支えや思いやり、幼稚園から小学生そして中学から高校へ、そして大学以降の恩師の方々など、枚挙にいとまがありません。このあと、この社会論が完成した後は、この項の「恩師」のうちの故人に限って実名を上げようとも考えています。というのも、その方たちの子孫を通じてあの世の恩師に感謝したいからです(笑)。世間は狭いもので、誰か一人くらい私の恩師の子供さんがきっと見てくれるだろうと思っています。

それから数限りない「学恩」を私に提供してくれた世界中の故人そしてご存命の方々。私は棺桶に入る時こっそりと本や楽譜を一緒に入れてもらおうと思っています。その方々の私の人生に与えてくれた知識や感受性や人生の楽しみ方などは、私の体と一体となっているものであり、それと一緒に彼岸(ひがみ=あの世)に行こうと思っています。

加えまして、このことは表に出してよいのかどうかわかりませんが(この部分はしばらくたって削除する予定です)、私のような愚かで未熟なとてもちっぽけな人間を、まさしく名実ともに「末席を穢す」人間を、一人前の人間として接してくれました博多ロータリークラブの会員の方々、そして2700地区や全国のロータリークラブの方々への感謝の念はとても大きいものです。大きな企業の支店長をしていました大学時代の友人に紹介されて入会させていただいたのですが、そこでのとても立派な経営者や企業家の精神、医師や弁護士や会計士さんたちの職業倫理、そして卓話していただいた方々から頂いた貴重な次式や情報は何事にも代えがたく、本来「土と共に生きるはずの農民」である私にはこれ以上の有り難い贈り物はないほどに感謝しております。この「館長の社会論」というホームページをつくろうと思ったのも、「反知性主義」がはびこるこの時代に、知性や書物の復権を願った、私なりの「職業奉仕」の理解によるものだとも思っています。多くの会員の中には「なんとまあけしからん奴だ」と怒られる方も多いと思いますがしかし、思想の自由が許され、過去には「世界人権宣言」の作成に国際ロータリークラブの方が何人も貢献されたという輝かしい歴史を持っているロータリークラブであること、その「世界人権宣言」や同じ思想の系列にある「日本国憲法」を何よりも尊い歴史的文書であると考えている私の考えを受け入れてくれる会員の方々も多いだろうと思って、私自身は誇りをもって20年近くも会員としての責務を果たしてきました。

私の人生を通じての「学恩」への謝辞の代わりに言葉として

ここでの「学恩」ということで、2つの文書を挿入します。一つは最近書いた「九大経済学部への文書」です。2016年の秋に書いた文章です。私の個人的な大学時代以降のことを書いたものですが、どの学生も同じような経験をしているだろうということ、そして私が教えている中学や高校生のために「勉強で頑張っているとこのような出会いの楽しみがある」というメッセージのためにここに置きました。

もう一つはこのホームページで何度も述べておりますジョン・スチュワート・ミルの「自由論」を和訳されておられます、斎藤悦則さんによる、ミルの本の「あとがき」のコピーです。後者は私たちの「人生そのもの」への感謝の見事なまでに立派な文章で書かれており、私がどのように頑張ってもこのような素晴らしい文章は書けないと思い、この文章に私の気持ちを託したく思ったからです。



九州大学経済学部の「同窓会報」へのお礼の文書

2016年11月19日(土)

当方は昭和44年度入学48年卒業の経済学部経営学科卒業の森英行と申します。新宮町で30年以上前から学習塾「志成館」という個性的な塾を運営しており、同時に生まれた時からのミカン農家の仕事も続けています。今日で67歳になりました。いつも同窓会費を払え払えと請求してくるのに辟易して、とうとう支払いをすることにしました(笑)。同時にいつも楽しんで読ませていただいている同窓会報と私の九州大学や九州大学在学中の先生方への学恩を振り返りながら、会報の写真の中にはまだご健在の恩師が数名写っておられ、もし事務局から先生方への感謝のメッセージが伝わればと思ってペンをとりました。もちろん先生方が私のことを知っておられるなどは考えてもおりませんのでご心配なく。

津守先生。私の在学当時今の古賀市の公務員宿舎に住んでおられました。私は子供のころから現在もまだ新宮町でミカン農家をしており、在学中にミカンを持って遊びにいったことがあります。先生はものすごく頭は切れそのうえとても謙虚でありそして言葉に表せないほどのやさしい方でした。卒業以来これまでの日々を先生のような優しさを守っていかうと生きてきました。また学生仲間では「美人の奥さん」がいることで有名で、お会いしたことがあるのですが、とても知的で優しそうなお美人の奥さんでした。九重でのハットフィールドのゼミ合宿では、私がいたずらに筋湯のバス停近くでいかがわしい本を買って合宿に持っていったのですが、先生は笑って学生といっしょに見てくれました。面白いことに数十年前には、箱崎の線路近くにあった「ぼたん」という学生が安く食事ができなおかつ飲めるところで先生の子供さんに会ったことがあり、その偶然に感動し、彼には「大学時代お父さんにとってもかわいがってもらった」というお礼はしたように思います。ちなみに「ぼたん」はまだ箱崎にあり、高齢のおばちゃん頑張っておられます。

丑山先生。津守さんのゼミの大学院生時代だったのだと思いますが、卒業する日に生協からだと思うのですが、「八朔(はっさく)」という蜜柑を差し入れていただいたことを忘れません。小さな蜜柑でしたがとってもおいしかったです。当時私はとても立派な「八朔」も栽培しておりましたので、内心では「小さいみかんだな」と思いましたが(笑)その優しい思いやりを忘れることはありませんでした。

都留先生。別名「釣ゼミ」で、レーニンの「帝国主義論」がテーマのゼミ合宿の時に、魚釣りを計画して、唐津の波戸岬で魚をみんなで釣って、次の日に天神の小料理屋で調理してもらい、おいしくいただきました。都留さんにつきましては語りつくせないほどの恩と思い出があります。まず九重でのヒルファージングの「金融資本論」のゼミ合宿の時に、ゼミの先輩から「九大の先輩たちに下駄で九重に登った強者がいる」という話を聞いていたのですが、その方が九州大学の法学部出身で最近文化勲章をもらった西鉄の現在は相談役をされている偉い方だということを知り、その本人に出会ったときには本当に驚きました。都留先生のゼミの同僚で NTT の支店長をされていた親しい友人の方、彼の結婚式の時には**森本先生**が主賓の一人でしたが、その友人の紹介で 49 歳の時から博多ロータリークラブに在籍しているのですが、そのこの会員でおられるという事情でお会いして、優しく接していただいております。実は今年その会長職が終わって、一安心してこの文書を書いています。都留さんは私たちが学生時代に「九州経済調査局」の設立に尽力しておられ、いつも授業をほったらかしにされることがありました。私は授業でハロッド・ドーマー理論を説明するときがあり、本を3冊も読んで調べて、大学の教室の黒板の六つの面に長々と時間をかけて書いていたのですが、授業をすっぽかされてしまって今でもとても怒っています。ちなみに九経調の方は、私より2年ほど前の経済学部の卒業生のはずなのですが、私の属する博多ロータリークラブに今年の3月に話しに来ていただきました。ロータリークラブは社会奉仕団体ですが私のところも含めてどこも親睦第一の楽しい組織ですので、時間がおありの方にはせひとも私の博多ロータリークラブへたくさん参加してください。火曜日の12:30からが例会日です。九大の学長さんは通例で福岡ロータリークラブのメンバーですがちっとも楽しくないはずなので博多クラブが一番です。西部ガスや九電の取締役など多くの経済学出身の財界人がおられます。平均年齢は60歳を超えていますので老後の憩いの場にちょうど良いと考えています。

都留さんは九電の会長やのちに福岡市長になられた九大法学部出身の方たちと共に祭り上げられて、福岡市の市長の選挙に立候補しようとしたことがあるのですが、その時に秘書みたいなことをして短い間お手伝いさせていただきました。いろいろと苦勞をされておりました。その時に献身的に尽くされていたのが**深川先生**で、とても謙虚で熱心な方でした。そののち農家の後継ぎの仕事として家屋の新築という当時の時代では「人生の大きな仕事」を終えたころは蜜柑産業が破滅的状態でしたので、このころから司法試験の勉強を本格的に始めていました。当時東京のLECというところで学んでいたのですが、その講師の一人がかの有名な**伊藤真先生**でした。最近も一票の価値の平等の訴訟では福岡で勝訴されています。美男子でスタイルもよく話術も恰好よいので、女子大生が授業中もきゃあきゃあ騒いでとても楽しかった思い出があります。彼は今でも私の先生です。年齢は私より年下ですが、都留さんの子供さんとは高校時代に少しだけお会いしたことがあります。現在一橋大学の経済学部の教授をされているはずですが、彼の論文を数回読んだところ、その文章の書き方がお父さんとそっくりで、「親子の絆」というものはこのようなどころに出るのだなあとうれしく感じたことがあります。時代を超えた発想の持ち主で多くの方と同様にもう少し長生きしてほしいなと思いました。

近代経済学を教えていただいていた**武野先生**。私は卒業には84単位でよいのに、120単位ほどを忙しい農作業の間(当時は5ヘクタールのミカン園を栽培する比較的大農家でした)に取ったのですが、武野先生の単位は取れませんでした。その分といっは何ですが、奥さんである「博多学」の**武野要**さんが博多ロータリークラブに話に来られましたのでしっかりと話を聞きました。

学恩といえば会計学の**服部先生**。「森君、君は九大に何をしに来たの?」と聞かれた時に「公認会計士にでもなろうかなと思っています」と答えたら、「そんな資格は早稲田とかの私立の学校でとるべきで、九大はもっとしっかりした学問をするところである」と怒られました。一つは「東京でないと公認会計士資格の取得は難しい」ということを親心で教えていただいたことと、もう一つは学費の年額がわずか12,000円ほどであった時代では、「学問の成果は人の

幸せに使うものであって、自分の利益に使うものではない」という厳しい教えがあったと感じました。私はこれまで実直に先生の教えを実践してきました。

新宮町が住まいなので木下先生や九州産業大学にも教えに来られていた深町先生を卒業後何度も見かけておりました。秀村先生は、先生から指示された「糟屋の炭鉱のデータ」を集めていた、くそまじめな福岡高校出身の人物をご存知だと思うのですが、彼は今も私の親友です。今も誠実でくそまじめです(笑)。

教養部時代に痩せたスタイルで学生に唾を飛ばして、懸命に憲法を講義されていた横田耕一先生と数年前に東北の地震の後の対策についてたまたま一緒にお酒を飲む機会がありました(もちろん先生が私のことを知っておられるはずもないのですが)、今でも若い頃のように強い気持ちで時代と戦っておられる姿に改めて敬意を感じました。私の憲法学の本は横田先生の先生筋にあたる小林直樹先生の本です。

その他もろもろの自分の人生を振り返ってみると、九州大学自体、そして九大の先生方や友人、特に経済学部の先生にはひとかたならぬ学恩と人生の楽しみを与えてくれたことを感じています。感謝に堪えません。私のような何でもない多くの人間が、日々先生方に感謝して生きていることはこの文書でご理解いただけたと思います。私はしがない学習塾の先生ですが、それでもいつも教えることの素晴らしさを感じて生きている。先生方が多くの優秀な学生へ与えられた学恩は、とても深いものだと感じています。私の感謝の気持ちが先生方に伝わればこれ以上の幸せはありません。先生方の末永い健康と幸せをお祈りし続けています。

私は司法試験の学習中も久留間鮫造先生のマルクス・レキシコンをいつも読んでいましたし、その後も法律学の学習と共に経済学の学習を怠ったことはありません。最近では、T・ピケティもジャック・アタリも。来年で100周年を迎えるレーニンの帝国主義論を読みなおしてみると最近書かれたのではないかと錯覚するほどです。経済理論の内実の研究で改めて学生時代の先生方からの指導に感謝する次第です。私も昔と変わらず、自然破壊、経済システムの変革、人心の破壊など、もはや時間的余裕もない時期にあるこの世界の中で、一人の市民としてできることはし続けます。それが先生たちへの恩返しであると考えています。

この文書が届く前にはしっかりと同窓会費を納入いたします(笑)。

高校までの恩師

私はことあるごとに「先生に恵まれた人生であった」と話しています。志成館の子供たちにも。別のと子にも書いていましたが、小学校の「吉住悟先生」。勉強をすることの楽しさを教えていただきました。中学校の音楽の中村とみこ先生に出会えたことが私の音楽に満ちた人生へのきっかけでした。因先生は、「農業高校に行くように」という方針を崩さない父親を説得して、普通高校である福岡高校への進学を導いてくれました。そして多感な頃の中学3年生の私たちを、面白くかつ熱心に指導してくれました。私の人生は因先生に負うところがとても多く、一日たりとも学恩を忘れた日はありません。そして今も私の新宮中学校3年生の時に起こったいろいろな出来事を、今でも面白くおかしく授業中に子供たちに話しています。「先生の時代は道路も建物などの町の造りも、一緒に生活していたおじさんもおばさんも、すべての人の心もとっても柔らかかった」などと。

以下の文はジョン・スチュワート・ミルの「自由論」を和訳された斎藤さんの「あとがき」のコピーになります。私の文章と解して読んでいただけたら有り難いです。表紙は上の方のページにあります。

幸せです。訳しながら、ほとんど一行ごとにそう感じました。

すてきなブレイズに満ちています。また、読んでいると、話の運び方も頭良さそう
で心地よい。翻訳にたずさわられたおかげで、それを心ゆくまで堪能できました。

「もちろんミルの『自由論』が『世界の名著』であることは、私も大学受験生のころ
から常識として知っていました。日本語による既訳も、大学に入ってから、「お勉強」
のために読んできました。しかし、恥ずかしながら当時の私は、ほとんど文字を目で
追っただけで本を読んだつもりになっていた。読みが浅く、これほど良い本だとは見
抜けず、おもしろさも味わいきれなかった。

いや、むしろミルの思想は「微温的」だと思い、また、ミルの「上から目線」的な
ものの言いぶりにも気持ちの隔たりを覚えました。

私は社会主義や共産主義、そしてアナキズムやその対極ともいえるべきファシズム
などの「とんがった」思想を好んで勉強しておりましたので、それらと比較すればミ
ルの思想はいかにも「ゆるかった」。

「私は自分の出身階層である下々に常に寄り添うことを善と感じ、大衆の文化や感性
すなわち俗っぽさを賞揚するのが自分の筋だと思っていました。巷の民草を低く見
下ろすミルとはまったく逆の立場の人間であると自負しておりました。」

ところがいま、そのミルの思想が心地よい。

私も年をとって、角が取れたせいでしょうか。仕事柄、人から「先生」などと呼ば
れるのに慣れて、思わず知らず目線が高くなってしまったせいでしょうか。一言で言
えば、私が「墮落」したせいでしょうか。

きっとそれもあるでしょう。

しかし、ミルの思想こそが、いまという時代においてはきわめて「とんがって
る」と『自由論』を訳しながら私は感じとりました。そのことも自分にむかって弁
解したい。

「いま、一般に個性の時代とか言われていても、私が属していた教育の現場などでは
逆に齊一性を求める空気が強まっているし、世間においても「変わった人間」はむし
ろ生きづらくなっているかもしれない。」

「こういう風潮のときに、「われわれはなるべく変わった人になるのが望ましい」「二
六三頁」と力説するミルの言葉にふれると、心が励まされ、生きる力もわいてきます。
「あえて変わった人になろう」というミルの呼びかけは、私にとって、ステイブ・
ジヨブズの「ステイ・フリーッシュ」というメッセージと並んで、大切な言葉として
心に染みこみました。」

「志成館のホームページもなるべく……」
ですから、私はますますミルの「自由論」をなるべく多くのかたがたに読んでもら
いたい。そう願います。若いひとびと、高校生にも、できれば中学生にも読んでもら
いたい。読んでいるうちに自分の頭まで良くなったような気分になりますよ。ものを
考える楽しさ、心地よさを味わっていただきたい。」

編集者である中町俊伸さんも同じ「志成館」で、文章を読みやすく、理解しやすいもの

にするために、力を添えてくださいました。おかげで、私の最初のものより文章は数
段ブラッシュアップされたと思います。その意味でも私は幸せでした。ありがとうご
ざいました。

二〇二二年四月

志成館のホームページをつくっていただき
齊藤悦則

ジョン・スチュワート・ミルへの斎藤さんの感謝の言葉はそのま
ま私にとりましての多くの先生方への感謝の言葉になります。

儒教国の日本では恩返しは「子から親へ」するもの、「習った生徒から教えてくれた先生」に対してするものと考えられています。その意味では私ほどの恩知らずもないのではと思います、罪滅ぼしにこの項の文章を書いているともいえます。ただ、私は西洋的な発想を取っており、「恩」は先祖から父母へそして子供へと舌へ流れていくものと考えています。ちょうど第二次世界大戦後に改正された、「民法」の親族や相続規定がそうなっているように、「愛」は次の時代につながり、流れていくという発想です。ですから私の「恩知らず」な部分は、私の教え子や隣人への「愛」として流れている、そのために日々頑張っているということを理解していただいたら無上の喜びです。

私は教育に関する仕事をしております。そして「**教育とは人から人への愛情を伝える仕事である**」と常々考えて子供たちを指導しております。恋人や家族が大切であればその人たちのために、日本や世界で災害に見舞われている人々や貧困や紛争に巻き込まれている人々の幸福を願う人間であれば、子供たちはその人たちの幸せの為に自分からすすんで勉強し努力するものです。その動機付けを与えるのが教育の任務であると考えています。

その信念を持って志成館でここにいる先生たちと30年近く懸命に指導して参りました。どれだけ目的が達せられたかはわかりません。しかしここにみえている親せきや地域の方々や友人やRCのみなさまからいただいた愛情そして父母から受けた私への限りない愛情は、すべて私の日々の授業や子供たちとの交流の中で子供たちに懸命に受け渡しつづけております。そのことが私からの、皆様方への精一杯のお礼であると解していただければ無上の喜びです。

・・・ある機会に話した時の文章です

これで私を生かしてくれた、時代や、時代の人々への恩返しは、少しはできたのではないかと思っています。私自身の能力のなさはこのホームページの処々に溢れていることはわかっていますが、私の「世界中の人々の、平和や豊かさや公平感の実現」という学生時代から抱いていた情熱だけは読み取っていただけたと思います。それ以上の望みはありません。

2017年11月22日(水)